

## 2024年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2024年度の学会賞が決定し、学術賞(単著部門)として大澤真平会員ならびに木原活信会員が、奨励賞(論文部門)として畠中耕会員が選ばれました。

授賞式は、第72回秋季大会一日目の2024年10月26日(土)に東海市芸術劇場大ホールにおいて、開会式に引き続いて行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



小澤副委員長 野口委員 金子副会長 大澤会員 木原会員 畠中会員 山縣委員長 和気会長 笹岡委員

### ◆ 学術賞(単著部門) 大澤 真平(札幌学院大学)

受賞作:『子どもの「貧困の経験」

——構造の中でのエージェンシーとライフチャンスの不平等』

(法律文化社、2023年5月30日刊)



この度は、学会賞授与の栄誉にあずかり、本当にありがたく思っております。審査の労をお取りいただいた審査委員の先生方に、まずは感謝申し上げます。また、本書に関わってくださったすべての方に心より御礼申し上げます。

本書は貧困のなかに暮らす子ども・若者の主体的な経験を、貧困の構造的な次元を踏まえたうえで明らかにしようと試みたものです。一方で本書の隠れたテーマは、貧困研究における「人間観」を問う点にあったと思っております。本書と同じく貧困のなかにおかれた当事者の質的研究に関しては、これまでオスカー・リースの「貧困の文化論」や、特に日本ではブルデューの影響が大きかったこともあり「文化的再生産論」を参照枠組みにすること

が多かったように思います。しかし、本書のバックグラウンドになっているロールズやセンやヌスバウムらの著作から学びを深めていくなかで、どのように生きていくか、どのようなものを大切にするかは、個々人の自由の問題であるということに大事にしたいと思うようになりました。また研究職につく以前に、8年ほど高校で仕事をしていましたが、関わってきた一人ひとりの子どもたちの、それぞれが大事にしている価値や生き方を尊重し、そして失敗も含めて生きていける基盤を整えることを、貧困・不平等の問題の核心におかなくてはならないと考え本書を書き上げました。そのことがどれほど伝わっているかは心もとないですが、本書はそのような「人間観」を前提に置いたつもりです。

ところで、きわめて私事で恐縮ですが、昨年度の学会賞を妻が受賞しております。我が家にとっては二年続けての社会福祉学会賞という栄誉ある賞をいただくことになりました。この間、妻と私と交代で育児休職を取りながら、ふたりで三人の子どもを育ててきました。おそらく研究を進めるのに通常よりとても時間がかかっているのだらうと思います。それでもなんとか夫婦ともに、それなりの研究成果を上げることができたことを誇りに思っています。これからの若い世代の研究者のみなさんには、ワークライフバランスを取りながら、焦らずに研究を進めてほしいと願っております。

最後に、これまでに会った多くの子ども、若者、そしてインタビューに応じてくださったおひとりお一人に感謝を述べたいと思います。みなさんから受け取ったことを、少しでも子どもや若者が自分の生活を実現できる社会的な環境を整えることに還元していきたいと思っております。

#### ◆ 学術賞(単著部門) 木原 活信(同志社大学)

受賞作:『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉

——「天助」の思想と日本への影響』

(教文館、2023年2月22日刊)



このたび、日本社会福祉学会の学会賞を授けていただいたことに、心より感謝いたします。かつて本学会の会長を務めた身として、本来であれば会員の中から優れた研究を見出し、彼らを受賞者として推挙する立場にあるべきではないかと、この賞を受けることに逡巡する気持ちがなかったわけではありません。しかし、生涯現役の研究者であり続けたいと願う者として、今回は素直に喜び、謹んで受賞させていただこうと思っております。私の研究は、専門的でややマニアックな歴史研究の学術書であり、一般の人々にはほとんど読まれることもないでしょうし、現代の社会福祉政策や実践に直接役立つこともないかもしれません。しかし、そのような本を社会福祉学

会が評価してくださったことに、特に感謝いたします。

本書の研究対象であるブリストルの孤児の父、ジョージ・ミュラーという人物を知ったのは、40年前の大学1年生のときでした。当時、ある方から『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラー』(いのちのことば社)という本を勧められ、それがミュラーとの最初の出会となりました。そして、はからずもその本を勧めた人が、後に私の妻となりました。その当時は、ただ素朴にミュラーの生き方に感銘を受け、自分も彼のように

なキリスト者として社会福祉の実践家になりたいと、漠然とした憧れを抱いていたにすぎません。

その後、石井十次の日誌、山室軍平の自叙伝、新島襄の書簡などを解読する中で、ミュラーの名前に何度も出会い、歴史上の点と点が結びついていくのを実感しました。それは私にとって、一種の驚きと感動をもたらす体験でした。日本の社会事業家である石井や山室にとって、ジェーン・アダムズやリッチモンドよりもミュラーが与えた影響のほうが大きいことも明らかになっていきました。その後、私は本格的に学究生活に入り、冷徹な実証主義に基づく歴史研究を進めていく中で、伝記に描かれるミュラーの「出来過ぎた話」が果たして本当なのか、懐疑的な目で見つめるようになりました。次第に、不遜にも史実を批判的に検証してみたいという野心を抱くようになり、これが私の研究のもう一つの動機となりました。ここ7、8年にわたって集中的に史料批判や資料分析を進めてきた結果、その史実が歴史的な批判にも耐えるものであり、否定することができないことが明らかになりました。

さらに、ミュラーが私と同じプリマス・ブレザレン系の「キリスト集会」の一員であり、彼自身がその初期のリーダーの一人であったことを知り、大変驚きました。そのおかげで、通常では手に入らない内部資料を比較的容易に入手することができたのです。不思議なことに、ブラザレン運動の源泉を探り、そのルーツをたどる過程は、阿部謹也氏の言葉を借りれば、「自分の中に歴史を読む」というプロセスそのものでした。自分のルーツと重なる部分を感じながら、ミュラーを通してブラザレン運動の歴史を掘り下げていく中で、共感し「わかる」と思える瞬間も多くありました。

約40年前、妻に勧められて読んだ伝記がきっかけとなり、このたび一冊の研究書として結実したことは、まさに不思議な邂逅です。本書は、多くのご縁や支えがあって初めて誕生したものといえますが、それら一つ一つが「はからずも」「見えざる手」に導かれていたのではないかと、深く考えさせられました。

#### ◆ 奨励賞(論文部門) 畠中 耕(福井県立大学)

受賞作:「1930年代静岡県における新興報徳運動と新興生活館」

(『社会福祉学』第64巻3号掲載 2023年11月30日刊)



この度は奨励賞という栄えある賞を受賞することができまして、心より嬉しく思います。一地域を研究対象とした地味な論文ですが、ご推挙いただきました審査委員の先生方にはあらためて御礼申し上げます。「学会賞事業要綱」には、「今後の研究の発展が期待される」ことが明記されています。まだまだ研究途上であることを自覚しつつ、謙虚に邁進する所存です。

私自身これまで特定の地域をフィールドに設定し、社会福祉の史資料の発掘に取り組んできました。地域の社会福祉の実践活動を掘り下げること、通史研究では網羅しきれない多様な史実を提供したいとの漠然とした思いからです。静岡県を研究対象に設定したのも、その延長に位置づけられるもので、当初から「報徳」の影響を意識して研究に着手したわけではありませんでした。社会事業への影響を意識する機会となったのが、静

岡山歴史文化情報センターに所蔵されている鷺山家文書との出会いです。同文書は小笠郡土方村長であった鷺山恭平氏が所有していた資料群で、報徳運動関係資料の他に県社会課、社会事業協会関係資料が豊富に含まれていて、「新興生活館」研究に着手するきっかけともなりました。講評でもご指摘いただきましたが、「新興生活館」をふくめて近代報徳運動に対する評価は難しく、どうしても国民精神総動員運動の一翼を担ったという評価に終着せざるを得ません。しかしその一方で社会保障制度が十分に発達していなかった当時（そのことを批判することは容易ですが）、地域が直面していた生活課題に対して教化的方策により民衆が主体的に対処する機会を作ったことも事実です。相反する評価の「ゆらぎ」や「緊張関係」を自覚しながら、今後の研究を進めていきたいと思えます。

本研究を進めるにあたっては、多くの方々からご支援をいただきました。お一人お一人のお名前を挙げることは出来ませんが、指導教授の今井小の実先生、地域史研究の先輩である矢上克己先生、報徳運動史研究の先輩である前田寿紀先生には、とりわけ多大なるご支援をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。そして最後に、今は亡き恩師の田代国次郎先生に受賞の報告をしたいと思えます。「平和的生存権」の保障実現に生涯をかけた孤高な研究者人生は、永遠に到達を見ない私自身の目標です。「早く一冊の本にまとめて世に問いなさい」とのお叱りの声が聴こえてきそうですが、これからも一步一步精進してまいります。